



私にできることは、小さなこと。

ほしのとみひろ

星野富弘さん(1946～2024)が、今年4月に亡くなりました。3階廊下に掲示もあり、どんな人か知っている生徒の皆さんも多いと思います。星野さんは、中学校の体育教員だった20代のとき、指導中の事故で手足の自由を失いました。9年間にもわたる長い入院中に、口に筆をくわえて文字や絵を書き始め、一つの作品に絵と詩が盛り込まれた「詩画」と呼ばれる作品の数々を生み出してきました。

しかし、手足が動かなくなってしまったときは、言葉に表せないほどつらく、家族や周りの人について文句を言うってしまうこともあったそうです。

鏡に映る顔を見ながら思った。もう悪口をいうのはやめよう。
私の口から出たことばを、いちばん近くで聞くのは
私の耳なのだから。

くちなし『鈴の鳴る道』より、1986年



つらいときや嫌なことがあったときに、周りの人や家族にあたったり、文句を言ったりしてしまう経験は、誰にでもあること。そんなときには、この詩を思い出したいものです。人のせいにせず素直に反省できるかどうかは、その後の成長を左右するポイントになると思います。

星野さんは「一日にどんなに無理をしても2時間くらいしか筆をくわえられない」と言います。筆につける絵の具や水の量を妻の昌子さんに伝え、何度もやり直してもらうそうです。母親や弟妹にも助けてもらいながら、長い時間をかけて一つの作品ができあがります。周りの人への「感謝」の気持ちが作品から伝わってきます。

私にできることは、小さなこと。
でも、それを感謝してできたら、きっと大きなことだ。

小さな実(ぐみ)『あなたの手のひら』より、1999年



先日、生徒会主催で部活動激励会が行われましたが、3年生の決意表明の中にも「感謝」という言葉がたくさんありました。支えてくれた方々への感謝を伝える姿に、3年生の成長ぶりが表れていました。“学ラン”に身を包んだ2年生による応援団もサプライズで登場し、1・2年生から3年生に熱いエールが送られました。

地区総合体育大会が始まり、熱戦が繰り広げられています。一人の力は小さくても、チームメート、家族、お世話になった方々への「感謝」の気持ちが、皆さんに大きな力を与えてくれるはずです。



部活動激励会 (㊤ 3年生, ㊦ 1, 2年生の応援)